# 思いに心を寄せて

愛知県立桃陵高等学校　衛生看護科３年　清水　もも花

「よろしくね。ごめんなさいね。こんな状態のままで。」初めて挨拶をした時、ベッドに横になったまま優しそうな笑顔で患者さんはそうおっしゃいました。私が受け持ったＢさんは七十代の女性で左大腿骨頸部骨折で人工骨頭置換術を実施後、鼠径部に血栓が見つかり、床上安静を強いられていました。

受け持ちが決まり、まずは電子カルテでの情報収集から始めました。そして日を追うごとに日常生活援助をすることが多くなると、Ｂさんと関わる時間も増えていきました。Ｂさんとは毎日関わる中で、今は県外に住んでいる娘さんのことやこれまでにご主人と暮らしてきた日々のことなどを話して下さるようになりました。ご主人の話をしている時のＢさんはとても明るく嬉しそうで、ご主人が大切な存在であるとすぐにわかりました。

受け持ってから５日が過ぎた頃、入院当時の思いを話して下さいました。「骨折した時はもうほんとにショックでね。また、お父さんと暮らせなくなるって分かったから。悔しくて自分が情けなくって。」悲しそうな表情でそう言いました。そんなＢさんを見たのは初めてでした。言葉や表情に出さないだけで入院生活に対する思いが何かあるのかもしれないと思い、コミュニケーションの時間を多くとるようにしました。「気をつけていればこんなことにはならなかったのに…」という自分自身に対して苛立っている言葉に、Ｂさんの気持ちを理解するためにもそばにいることが必要だと思いました。「退院後はお父さんと二人で建てた家に戻ってゆっくり普通の生活がしたいね。」と話して下さったこともありました。私はＢさんの思いを知り、退院までの入院生活を支えたいと強く思うようになりました。しかし、血栓があり、肺塞栓を引き起こせば命に関わるため、安静度が制限されている状況で私が実施できる援助は限られていました。せめて清潔援助だけは苦痛のない援助をすることを心がけ実施しました。

受け持って二週間が経った頃、検温を行うためにベッドサイドに向かいました。笑顔で「おはようございます。」そう声をかけましたが、いつもとは様子が違いました。何かあったのではないかと思い、患者さんの言葉を待ちました。「昨日ね…」とＢさんは弱々しい声で話し始めました。「先生からはもうお父さんと一緒に住むことが出来ないって言われたの。本当にショックでね。」顔を覆いながらそう言いました。そんな姿を見て私は胸が締め付けられました。ご主人は認知症を患っており、同じ病院の精神科病棟に入院していました。医師からは「Ｂさんの今のＡＤＬの状態から考えると、一人で認知症の旦那さんを介護していくのは難しい。二人で共に過ごしたいのであれば施設を探さなければならない。」と告げられた

のでした。私はＢさんが自宅でご主人と生活を送っていきたいという目標をもって、身体の回復に向けてリハビリテーションに意欲的に取り組み、入院生活を送っていることを知っていました。現実を受け止めることができず、落胆するＢさんの気持ちがわかり私もとても苦しかったです。Ｂさんの表情は硬く、自分の感情を押し殺しているように見え、心の中は戸惑いや悔しさ、怒り、不安や悲しみなどたくさんの感情が渦巻いていたと思います。私は言葉を掛けることもできず、ただ頷いて聞くことしかできませんでした。Ｂさんはその後も自宅でご主人と二人で生活していた当たり前の日常を送ることのできない悔しさや悲しさ、虚しさを度々言葉にしました。Ｂさんの言葉や表情、思いに私自身の感情も揺れ動き、病気になるということはその人の生活をも大きく変えてしまうことになるのだという現実を目の当たりにしました。私は病気やけがで入院しても治れば退院して、普通の生活に戻ることができると思い込んでいました。しかし、Ｂさんのように骨折が治ったとしても、患者さんの望む生活が送れなくなることもあると知りました。私は何ができるのか、何をすれば良いのかを一生懸命考え、辛い気持ちを少しでも和らげられるようＢさんの思いに耳を傾けました。

Ｂさんの目標は自宅でご主人と一緒に生活していくことでした。しかし、医師から「退院後、自宅で旦那さんと二人で一緒に暮らしていくことはできない。」と言われてからは、リハビリテーションに対して前向きに取り組む意欲が低下しているように感じました。

数日後、精神科病棟の看護師さんがＢさんを励まそうとご主人を連れてきて下さったそうです。その翌朝Ｂさんと会った時、久しぶりにご主人に会えて余程嬉しかったのか、表情はとても明るく気持ちに変化があったことがすぐにわかりました。ご主人には医師から伝えられたことは話さず、たわいもない会話をしたそうです。退院後の暮らしについて話さなかったのは認知症であるご主人へのＢさんなりの心遣いだったのだと思いました。そして、悲しい表情をするご主人を見たくないという気持ちもあったのかもしれません。Ｂさんは自分のことよりも常にご主人のことを考え、大切に思っていました。そしてＢさんにとって何よりもご主人の存在が早く良くなりたいという気持ちを後押ししていました。

ご主人と会ってからのＢさんはリハビリテーションにも前向きに取り組み、歩行器を使用して歩行ができるようになり、順調に回復していきました。その姿を見てとても嬉しくなりました。

実習最終日、患者さんが私に対して、「必死に色々やってくれてありがとうね。楽しかった。心強かった。これからも頑張ってね。きっといい看護師さんになれるから。」と涙を流しながら声をかけて下さいました。なかなか知識や技術に自信が持てずにいましたが、十四日間必死にＢさんの気持ちに向き合って援助した気持ちが伝わり、自分の看護はＢさんの支えになっていたんだと実感することができました。

今回の実習を通して、患者さんの最も近くで関わる看護師が、生活背景や家族背景も含めて一人の患者さんとして「看る」こと、一生懸命患者さんに向き合って気持ちを汲み取り、そばにいて援助することが看護を行っていく上で重要なことであると思いました。

Ｂさんを受け持たせていただき、患者さんの持っている自然治癒力を引き出すためにできることは何かを常に考え、看護していくことが必要だと理解しました。患者さんの気持ちは日々変化しています。日々変化していく患者さんの気持ちに目を向け、辛さを和らげ、喜びを共有することが看護であると実感しました。

患者さんの思いに気づき、その思いに応えることができるようこれからも学び続けていきます。患者さんの思いに心を寄せて・・・